

アーカイブズ展序章 —栗田寛の見た近代日本—

※茨城県立歴史館では、平成28年12月3日～平成29年1月22日にかけて、アーカイブズ展「近代茨城の群像—記録史料に秘められた茨城の記憶—」を開催します。本展では、大日本史編纂にその生涯を捧げた「明治の碩学」栗田寛^{せきがく ひろし}、亡父の遺志を受けつぎ、大日本史を完成させた「水戸の碩学」栗田勤^{いそし}、「レイテ沖海戦・謎の反転」で有名な海軍中将・栗田健男^{たけお}の、三代にわたる栗田家の歴史と、彼らが見つめた近代日本の姿を、当館の寄贈・寄託資料を中心にご紹介します。

明治日本を代表する学者・栗田寛から、第二次大戦・最大規模の海戦となるレイテ沖海戦を主導した海軍軍人・栗田健男へ。文から武へと遷り変わる栗田家三代と、近代日本のおよそ100年にわたる激動の歴史をひもとく本展の序章として、その物語の一端を以下にご紹介しましょう。

1 明治の碩学・栗田寛 —大日本史編纂に捧げた生涯—

「明治の碩学」と称された栗田寛（1835-1899、字は叔栗^{しゅくりつ}、幼名八十吉、のち利三郎^{りつり}、栗里・蕉窓・銀巷などと号す）は、天保6年（1835）9月14日、水戸下市本六丁目で搾油と米穀商を営む栗田彦六^{まさふみ}（雅文）の三男として生まれました。時の彰考館総裁・豊田天功に見出され、安政5年（1858）6月、町人の出ながら24歳で彰考館に登用されると、その俊英ぶりを発揮していきます。

【史料1】は、寛が登用された際に豊田天功が記した彰考館の記録です。その記述からは、天功がその才能に大きな期待をかけて、寛を推薦していたことがわかります。



栗田寛写真（個人蔵）



六月 此の分六月八日に指出候 豊田彦次郎
御用部屋小僧
栗田利三郎
右之者好學ニテ出精相勤御編修ニ付テ之御用
相弁じ申候間出格之御引立御座候様仕度一昨年
(以下略)

【史料1】豊田天功「館務記」（高橋清賀子家 No.103-3, 当館寄託）

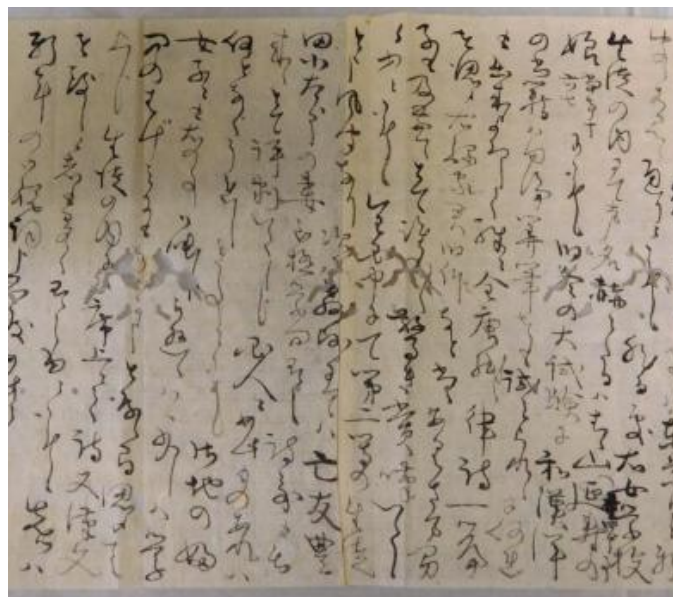
師・天功の死（元治元年〈1864〉）、元治甲子の乱にはじまる幕末の動乱を経て、時代は明治へと移っていきます。幕末から続く藩内の動揺、また廃藩置県後の混乱のなかで、寛は水戸徳川家の家扶などの立場で彰考館文庫や潜龍閣蔵書の保全、大日本史志表編纂の継続、常磐神社の創建などに奔走し、徐々にその活躍の場を広げていきます。その学識の深さと彰考館での経験は、新時代の「国のかたち」を模索する明治新政府に必要とされ、明治6年（1873）7月に朝命によって上京、太政官教部省に出仕し、その活躍の舞台を新都・東京へと移していきます。

2 栗田寛の東京レポート ―明治に輝く水戸女性―

上京した寛が眼にしたものは、復古と開化に揺れながらも、西洋諸国に範をとった「文明開化」を目指して急速に変貌をとげる東京、そして明治日本の姿でした。東京時代に書き記した寛の書状を見ると、時代の変化に驚き、戸惑い、また洋風化に流れる世相を批判的にとらえる寛の姿が浮かびあがってきます。ここでは、東京レポートとでも称すべき、寛の書状の一例を紹介しましょう。

【史料2】は、明治10年（1877）1月25日付で、久慈郡太田村の叔父小沢伝五郎（時発、妻が寛の祖父惟肖四女仲子）に出された書状です。同書のなかで、寛は中央の政情として江華島事件後の日朝交渉のために黒田清隆・井上馨が派遣されたことを伝え、また東京市が西洋風の煉瓦造りの街並みへと変わりながらも借家・売家が多く「真の文明開化国とハ難申候」、学校も多く作られたが「学問も大方技芸の如く相成、学問ハ出来候ても品行ハ不宣と申姿」などと西洋化する東京の風景を批判的に論じながら、「当地女学校開館に候て何レも婦人ナリ、皇后の宮御臨幸被為在」と、前年11月29日に東京女子師範学校（現お茶の水大学）に昭憲皇后が行啓したことを伝え、次のように続けています。

【史料2】栗田寛書状（小沢伝五郎宛）明治10年（1877）1月25日付 （「小沢家史料」No. 28-4, 当館蔵）



(前略)

聞二相見候通りニ御座候、然る処右女学校
豊西郎事
生徒の内にて声名嚇々たるハ青山延寿の
娘当年十六七に御座候、旧冬の大試験に和漢洋
の書籍ハ勿論算筆をも試ミられ候ニ何れ
も出来よろしく殊ニ全唐紙へ律詩一篇
を認め右禄家君旧作なと書候ありさま男
子も及兼候とて誰もく驚き賞嘆いたし
候由ニ御座候、全国中にて第二等の生徒
と申風聞なり、次に教諭にてハ亡友豊
田小太郎の妻至極学問有之、詩歌も出
来候とて評判いたし申候、国人ニ如此ものあれハ
何となくうれしき事ニ御座候、御地の婦
女子ニも右の事御咄し被遊候ハ、少しハ学
問のはげミにも相成可申と存候間認め差
上申候、生徒の内ニハ席上ニて詩文漢文
を致し候者も多く有之由ニ御座候、先ツハ
(以下略)

文中の「青山延寿の娘当年十六七」とは、青山千世^{ちせ} [1857-1947] のことです。千世は、弘道館教授頭取代理、彰考館権総裁などを務めた水戸藩の学者・青山延寿^{のぶとし}の長女であり、また近代日本の女性運動家、戦後初の労働省婦人少年局長として著名な山川菊栄^{きくえ} [1890-1980] の母にあたります。前年の明治8年(1875)7月の入学試験で優秀な成績を収めた千世は、11月29日の皇后行啓の際に「勸善訓蒙」中の慈母の教えという御前講義をする榮譽を得ました。千世の伯父青山延光^{のぶみつ}やその子勇^{いさむ}も含めて青山家と交流の深かった寛も、書状のなかで「全国中にて第二等の生徒と申風聞なり」と、知人の娘の活躍を誇らしげに伝えています。



また「亡友豊田小太郎の妻」とは、豊田英雄^{ふゆ} [1845-1941] を指します。日本の女子教育や幼児教育に大きな貢献を果たすことになる英雄は、明治9年(1876)5月に東京女子師範学校の訓導(翌年9月に副舎監兼任)となり、同10月には新設された附属幼稚園の保母になります(高橋清賀子家 No.フ 149,159-160 <当館寄託>)、日本最初の保母とされる)。生前、英雄は「私も先生をやめて生徒になりたかったのですがね」と笑いながら振り返ったとされますが(山川菊栄『おんな二代の記』)、師の天功、その子小太郎(香窓)、そして英雄の養子伴^{ばん}も含めて豊田家とも交流の深かった寛は、「至極学問有之、詩歌も出来候とて評判いたし申候」と亡友の妻・英雄を称えています。

豊田英雄写真(高橋清賀子家 No.フ 31-2, 当館寄託)

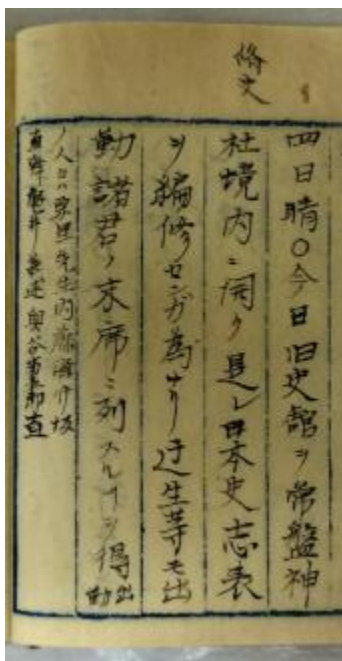
明治10年(1877)といえば、歌人・中島歌子が、明治の女流作家・三宅花圃^{かほ}や樋口一葉などの令嬢たちに和歌を教授した歌塾「萩の舎」を発足させた年でもあります。どうやら「明治」という新しい時代を迎え、江戸時代を通じて水戸藩でじっくりと醸成された「水戸の学風」が、水戸女性の輝きという形で新都・東京で華開こうとしていたようです。寛は、東京での水戸女性(「国人」)の活躍は「うれしき事」であり、それを国元の女性に話せば「学問のはげみ」になるであろうと叔父・伝五郎に伝えており、新しい時代の息吹を大きな期待をもって見つめていたことがわかります。

3 栗田寛の死 —四十年一日の如く—



豊田伴写真

(高橋清賀子家 No.フ 353-3, 当館寄託)



【史料3】豊田伴「日誌」明治12年(1879)7月4日条

(高橋清賀子家 No.378, 当館寄託)

脩史
 四日晴○今日旧史館ヲ常盤神
 社境内ニ開ク、是レ日本史志表
 ヲ編修センガ為ナリ、迂生等モ出
 勤、諸君ノ末席ニ列スルコトヲ得〔出勤
 ノ人々ハ栗里先生、内藤濟、井坂直幹、
 亀井善述、奥谷直〕

上京した寛は、教部省を皮切りに太政官修史館、元老院、東京帝国大学、文部大臣官房などに出仕しながら、師天功の宿願でもあった大日本史志表編纂に精力的に取り組みます。明治12年(1879)1月3日、旧水戸藩主徳川昭武より大日本史志表完成の命を受け、6月5日に偕楽園南崖の地に彰考館が新築され、7月4日には修史事業が再開されています(【史料3】)。その後、更に20年の歳月をかけて志表編纂が進められましたが、いよいよ目次も確定し、「一志三表」の上木を残すのみというところで、寛は病に倒れます。

明治32年(1899)正月、死期を悟った寛は子の勤を呼び寄せ、約20日間にわたって大日本史編纂に関する事歴の口述筆記をさせます。同24日深夜には再び勤を呼び寄せ、その手を取り「暗に永訣を告ぐるものゝ如く」暫し沈吟し、「病状甚た悪し、使を馳せて医を招くべし」と命じました。駆けつけた長谷川医師の診察後、寛は次のような遺言を勤に残しています。

…余や今夜を以て永訣すべし、汝等多年奉養の勞を謝す、また余か門人知友にも其平素の好誼を謝せよ、大日本史志表の事は余か宿志の存する所なり、今や悉く其上木を見ざるは遺憾なれども予て命じ置きたる方法に依りて**黽勉**することなくば必ず上木完成すべし、汝にして能く此事を成さば余が**義烈二公に報ずる所以の微衷**も初て達するを得ん（「栗里先生年譜略」）

義烈二公、即ち第二代水戸藩主徳川光圀と第九代藩主徳川斉昭を祀る常磐神社の創建（明治6年〈1873〉）を、友人原田明善らとともに寛が主導したことをあわせて考慮すると（栗田寛『常磐物語』明治30年〈1897〉）、寛自身の学問への情熱と修史への志に加えて、大日本史編纂の端緒を切った義公光圀と、志表編纂を師天功に指示した烈公斉昭への深い敬意、そして偉大な先輩たちから連綿と受けつがれてきた修史完成への責任感などが、「四十年一日の如く」と称された、寛の彰考館における修史事業への一途な献身を支えていたと考えられます。



栗田寛像（水戸市東台，平成5年）



大日本史編纂之地
（水戸市二の丸，昭和32年）

同26日午前3時40分、大日本史編纂に生涯を捧げた栗田寛は、その完成を目前にして息を引き取ります。享年65歳、死因は胃ガンでした。明治を代表する学者の死に対し、明治政府は文学博士の学位授与（1月25日付）、高等官一等陸叙、特旨による従四位叙位、瑞宝章賜与（1月26日付）などによって、その功勞に報いました。当時の主要な新聞や雑誌も「学海の為めに痛惜の至に堪へざるなり」（『東京朝日新聞』1月27日付）、「独り水戸の為めに悲しむのみならず実に国家国史の為哀惜せざるを得ざるなり」（『教育時論』第497号）と次々に惜別の辞を送り、『東京日日新聞』は社説「栗田博士と国史」（1月27日付）を掲げ、「吾人は平生先生を目するに生きたる日本史を以てせり、大日本史に於ける先生の功や大ならざるに非ず、偉ならざるに非ず、去れど是れ所謂九牛の一毛のみ、生きたる日本史は大日本史以外更に大なる史上の資力を有したるや論なし、今や之を失ふ、悼惜何ぞ堪えん」と最大級の賛辞を送り、哀悼の意を表しています。

津田信存（東巖，明治 25 年〈1892〉），小宮山綏介（南梁，明治 29 年〈1896〉），菅政友（桜廬，明治 30 年〈1897〉）と「水戸の碩学たち」が続々と物故し，また旧幕臣・勝海舟〔1823-1899（1/19）〕が約一週間前に亡くなったこともあり，栗田寛の死は，新世紀を前にして，茨城のみならず日本の国民全体に一つの時代が終わろうとしていること，そして旧藩以来の「水戸の学風」を直接に伝える最後の灯火の一つが，ついにこの世から失われたことを痛切に実感させたのです。

寛の葬儀は，子の勤を祭主として 1 月 28 日に東京・谷中で営まれ，続いて柩が郷里の水戸へと送られ，同 31 日に先祖の塋域がある水戸・六反田の六地藏寺へ神式で埋葬されました。その六地藏寺には，水戸藩出身の最後の将軍・徳川慶喜の題字「繼往開来」，畏友内藤耻叟の撰文と次兄亀井直（有斐）の書になる墓碑が，明治 36 年（1903）1 月 25 日に建立されています。その碑文のなかに，次のような一文があります。

…初め国史紀伝既に成り，志表未だ備らず。烈公これを憂い，天功に命じてこれを修正せしむ。

未だ竟らずして歿す。ここに至って君，専らこれに任じ，拮据校讐，四十年一日の如く，十志五表皆完し，〔圀順〕公，成に随ってこれを朝廷に上る。（栗田寛墓碑「繼往開来」）

安政 5 年（1858）に師の天功によって彰考館御用部屋小僧として取り立てられてからおよそ四十年。寛は，まるでそのために生まれてきたかのように，大日本史志表完成にその身を捧げました。四十年をわずか一日で駆けぬけたかのような，という耻叟の撰文は，寛がいかに修史事業に情熱をそそぎ，志表編纂に専心していたかを見事に表現しています。そして，約 250 年の歳月をかけた大日本史編纂事業が終局を迎えようとするとき，慶喜の題字に見るように，従来の「彰往考来」（往〈過去〉を彰らかにし，来〈未来〉を考える）から，「繼往開来」（往〈過去〉を継承して，来〈未来〉を切り開く）へ，つまり修史事業の成果を実践によって社会に還元すべき，新しい時代を迎えようとしていました。

その責務は，寛の師風を受けた後進たち，特に寛の家塾「輔任学舎」を巢立っていった後進たちへと引きつがれてゆくこととなります。



栗田寛墓碑「繼往開来」
（六地藏寺，明治 36 年）

4 師風を受けつぐ者たち

夢半ばで倒れた寛の遺志は、その師風を受けつぐ者たちによって引きつがれました。特に寛の家塾「輔仁学舎」からは、養子勤や豊田伴のほか、清水正健、菊池謙二郎、大内地山、雨谷毅、立林宮太郎など、大正から昭和戦前期にかけての水戸の学風を支えた学者や教育者、ジャーナリストなどを多数輩出し、また塩沢昌貞（第4代早稲田大学総長）、吉田弥平（東京高等師範学校教授）、三浦周行（京都帝国大学教授）など、中央の学界・教育界で活躍した著名な文人も輩出しています。

勤を中心とする最後の彰考館員が「一志三表」を上木して大日本史（紀伝志表 397 巻、目録 5 巻、合計 402 巻）を完成させたのは、明治 39 年（1906）10 月のことでした。12 月 26 日には水戸徳川家第 13 代当主・徳川圀順が常磐神社で義烈二公の神前に大日本史完成を奉告し、同日、栗田勤起草の上表文を添えて大日本史 402 巻が朝廷に奉獻されます。寛の死から、わずか 8 年後のことでした。

彰考館史局は閉鎖され、同館が蒐集した約 10 万点に及ぶ膨大な史料は、明治 40 年（1907）1 月に明治天皇から一万円、昭憲皇后からも三千元が下賜され、明治 42 年（1909）に常磐神社境内にレンガ造り瓦葺き二階建ての彰考館文庫が設立されて、永世保全の策がとられています。

13 歳にして古事記を購入し、「白妙と降り敷く雪の寒き朝しろたえげふることぶみ 古事記を読みあに吾は行く」とその歎びを詠い、17 歳で初めて師の天功に会った際、「日本には是と云ふ善き歴史が無いから、歴史を書き見たい」（栗田寛「学問の感想」）と訴えたという栗田寛。その遺詠は「斯文のこのふみ為ためにと尽す我身等は 如何いかで空しく朽くちが果つべき」だったといひます（杉雨生「晦屋栗田翁夜話」241）。志表完成を目前にして倒れた寛の無念さは如何ばかりだったか。しかし、寛の思いは、師風を受けつぐ者たちによって確実に引きつがれ、水戸藩 約 250 年越しの夢が達せられたのです。

今、寛ら明治の彰考館員たちが大日本史志表編纂に情熱をそそいだ彰考館の跡地には、寛の孫にあたる栗田健男の書（碑陰）になる記念碑「大日本史完成之地」が、忘れ去られたかのように偕楽園のほとりに建ち、ひっそりと彼らの夢の趾をとどめています。



大日本史完成之地
(偕楽園南崖，昭和 42 年)



栗田勤写真（個人蔵）



栗田健男写真（個人蔵）

この後、勤は明治44年（1911）7月28日付で茨城県史蹟天然物調査囑託を拝命して社会へと出て行き、「水戸の碩学」、郷土の水戸学者として確固たる名声を得ていきます。一方、勤の次男・健男は、父や祖父とは異なり、文人ではなく武人として未来を切り開く道を選びました。海軍提督としてのキャリアを重ね、昭和19年（1944）10月、第二艦隊を率いてレイテ沖海戦に臨みます。

さて、この後の栗田家とその末裔たちが見た近代日本の姿は、如何なるものだったのか。その物語は、本年12月3日より開催するアーカイブズ展「近代茨城の群像—記録史料に秘められた茨城の記憶—」にて、ご紹介することにしましょう。乞うご期待ください。

<主な参考文献>

- ・三浦周行「近世史学史に於ける栗田寛先生」（『歴史と地理』第15巻第3号，1925）
- ・大森金五郎「栗里栗田寛先生の事蹟」（『新国史論叢』吉川弘文館，1936）
- ・山田孝雄「栗田寛のこと—私の欽仰する近世人・その三一」（『文藝春秋』第21巻第3号，1943）
- ・昭和女子大学近代文学研究会編『近代文学研究叢書』第4巻（昭和女子大学光葉会，1956）
- ・安井良三「栗田寛博士評伝」（『古代学』第6巻第4号，1958）
- ・照沼好文『栗田寛の研究—その生涯と歴史学』（錦正社，1974）
- ・同『水戸の学風—特に栗田寛博士を中心として』（水戸史学会，1998）
- ・同『栗田寛博士と「継往開来」の碑文』（錦正社，2002）
- ・秋元信英「明治二十六年栗田寛の修史事業構想」（『國學院女子短期大学紀要』第1巻，1982）
- ・『水戸市史』下巻（一）（水戸市，1993）

（史料学芸部 歴史資料課 主任研究員 石井 裕）